

紙上法話

十四番目の月

センター布教師 西禅寺住職 小川裕史



『何事も、自分の思い通りにはいかない』そんな当たり前の事が、はずかしながら五十八年生きてきて最近やっと分かってきました。家族が多いと楽しいことも多いのですが、その分思い通りにいかないことも多く、落ち込んでしまいます。そんな時いつも私を勇気づけてくれるのが徒然草の『總て何も皆、事の整ほりたるはあしき事なり』の一句です。四世代の大家族で暮らしているお檀家さんのお祖母ちゃんからご供養を頼まれました。よくよく聞いてみると『今年には、御先祖様の年回は無いけれど孫たちの結婚が決まったり曾孫が生まれたり、とにかく良いことばかりが続きます。だから御先祖様にお礼のご供養をさせてもらいたいと思います。子ども、孫全員を集めるので、お話をしてほしい』と言われるのです。

法事当日は、遠方からの家族も集まり、お仏壇の部屋には、赤ちゃんの泣き声も聞こえる楽しく温かい雰囲気でした。

私は、有り難く思い、徒然草のお話をさせて頂きました。第八十二段に『為残したるを、さて打ち置きたるは、面白く、生き延ぶる事なり。内裏造るにも、必ず作り果てぬ所を残す事なり』とあります。

日光東照宮の陽明門は逆柱があることで知られています。柱の中の一本だけが彫刻の模様が逆向きになっています。しかしこれは誤って逆向きにしたわけではなく、「建物は完

成と同時に崩壊が始まる」という言い伝えを逆手にとり、わざと柱を未完成の状態にすることで災いを避けようとしたものだと言われています。完全なものは決して良くはない、それで内裏を造る時でさえも、必ず一か所は造り残しをしたそうです。また江戸時代には、家を建てる時「瓦三枚残す」といわれています。平成を生きている私達にも通じる先人の知恵を感じます。

お話の後、お茶を頂いていた時、熱心に聴いて下さっていた一人のお嫁さんが、私に話して下さいました。

介護真っ只中の彼女は、ある日のこと精神科医の講習会に行つてこんな話を聞いたそうです。『介護の満点は六十点』それを聞いて肩の力が不思議にすつと抜けたそうです。避けて通れない親の介護であれば誰しも百点を望みたくありません。でも数年、数十年続きますと介護される方も、する方も疲れ果ててしまいます。無理をせず、ぼちぼちと、そんな励みでしたっと思えます。

最高とされる満月の夜を過ぎて、十六夜、立ち待ち月、居待ち月と不完全なものにも情趣を見出してきたご先祖様の心に暖かさを感じます。

『トつぎの夜から欠ける満月より 十四番目の月がいちばん好き♪』

これは私の車で流れる、ユーミンの歌ですが、今夜見上げた月が、どんな形でも愛でる心を持ちたいものです。